

〔原 著〕

英国に存続する民俗フットボールの研究 —その存続状況と変容、存続の意味について—

吉田 文久

(日本福祉大学スポーツ科学部)

A Study about Folk Football Games Playing Now in Britain —About the situation, transformation and meaning of continuing the game—

Norihisa YOSHIDA ¹⁾

【Abstract】

This study primarily examines the forms of folk football that continue to be played in Britain and how they have survived, adapting themselves to modernisation. Additionally, it considers the ideal styles of modern sports, using folk football survivals.

Folk football games being currently played in 17 towns or villages in Britain were observed and categorised according to the characteristics of their players and spectators. Further, the factors leading to the continuing existence of these folk football games were examined, followed by a detailed discussion regarding their escape from extinction. The currently played folk football games have certain interesting points of difference from their modern counterparts that are controlled by rules. Nevertheless, such games have adopted the aspects of modernisation, and their current form differs from their earlier instantiations. It can also be observed that locals are the main participants in such games. While rules and environments may change, the pleasure people experience through the sports remains the same. The efforts of players in keeping the pleasure of the original sport alive are a suitable object lesson for how and why people participate in modern sports. An observation of sports participants can also help us realise what is needed to maintain and develop sports.

The above research reveals how the study of folk football turns into precious material to contextualise sports in the 21st century to investigate the reason sports are played.

Keyword: folk football, play context, transformation, meaning of continuing the game

キーワード: 民俗フットボール、ゲーム様相、変容、存続の意味

1) Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

1. はじめに

筆者は、球技の教科内容研究に取り組んでいた中で、技術や戦術というスポーツをプレイすることにかかわる内容だけでは、スポーツを総合的に学んだことにはならず、それらに加えて、スポーツのもつ文化的意義の学びを位置づける体育の在り方を模索してきた。一方、Jリーグの誕生以降、「サッカーは文化である」と標榜されながら、国民にその意味が十分理解され、浸透したとは言い難く、そのための学習システムも構築されていないままであった。

そのような中で、そもそもサッカーやラグビーの面白さとは何か、それはどのように文化として位置づき、受け継がれてきたのかという疑問から、サッカー、ラグビーの起源と言われるフットボールが現在も英国で行われていることを知り、その調査・研究に取り組み始めた。

サッカーとラグビーの原型とされるフットボールは、かつて英国の各地に分布していた。そのフットボールについては、様々な名称で表現されているが、それは、単なる私的な気晴らしではなく、ある社会的意味を持った民俗的活動として地域の中に深く根を下ろし、また多様な形態を持っていたことから民俗フットボール(Folk Football)と呼ぶことがふさわしいとされている(中房、1993. Collins, 1998)。

この民俗フットボールに関する学問的関心は古く、19世紀初めにJ. ストラット(1810)の古典的研究において競技の姿が簡単に描写されている。その後、M. シャーマン(1887)、F. P. マグーン(1938)、M. マープルズ(1954)らによって民俗フットボールの競技形態の実態をより理解することができるようになった。さらに、E. ダニングとK. シャド(1979)によって、民俗フットボールを社会学的な視点から分析し、その「構造的特質」を抽出する研究も見られるようになる(中房、1993)。しかしながら、それらによって、民俗フットボールのイメージを持つことはできても、その実態を十分把握できるものではなく、特に、E. ダニングとK. シャドの研究は、民俗フットボールを特定の事例によっ

て「野蛮」と位置づけ、近代スポーツと二項対立的に比較するなど、その姿を十分描き、示したものとは言えない。そして、それ以降、英国他においてこの分野の研究の進展や成果の提示は見られない¹⁾。

日本においては、唯一中房(1991)が文献を頼りに英国で行われていた、あるいは行われている民俗フットボールを取り上げ、そのゲーム内容を丁寧と比較、検討した研究が見られる。しかし、その中房の研究はフィールドワークによって、ゲームが民衆にどのような位置づき、実際の試合の様相はどのようなものかを踏まえた上で分析、整理されたものではなかった。

そこで筆者は、英国²⁾において現在も17箇所の町や村で民俗フットボールが存続していることを確認し、それらのゲームを直接観戦し、資料・情報収集のための調査を実施することにした。

2. 研究の目的

本研究は、まず、英国に存続する民俗フットボールがどのような形態で存続しているのかについて整理する。そして、近代化の流れに抵抗し、また順応してどのように変容しながら存続してきたかについて明らかにする。さらに、民俗フットボールが現在も存続する意味を考察することにより、現代スポーツのこれからの在り方や問題解決に向けた議論に示唆を与えることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究では第1に、英国に存続する民俗フットボールの地を訪れ、ゲームを観戦し、映像に記録し、そこに残る文献・記録・資料を探り、加えて地元住民(運営者、プレイヤー、観客など)へのインタビュー、アンケートを実施することによって、それらのゲームの実態を理解する。第2に、そのようにして記録されたゲームを(1)ゲームの成立について(2)競技内容について(3)ゲームの持つ社会的意味について、とい

う視点から、①試合の開催日 ②試合の開始時間 ③参加者の年齢 ④使用されるボールの数(ゲーム数) ⑤ボールの特徴 ⑥チームの区分 ⑦試合会場 ⑧ゴールの場所 ⑨参加者の数 ⑩女性の参加 ⑪ルールの有無 ⑫ゲームの運営組織の有無 ⑬ゲームの経済的基盤 ⑭始球する人物 ⑮勝者への褒美 ⑯審判の存在、の16項目³⁾を設定し、整理する。そして第3に、かつて英国各地でプレイされたゲームの様相やその歴史的意義にも遡及し、民俗フットボールの変容・存続の意味について考察する。

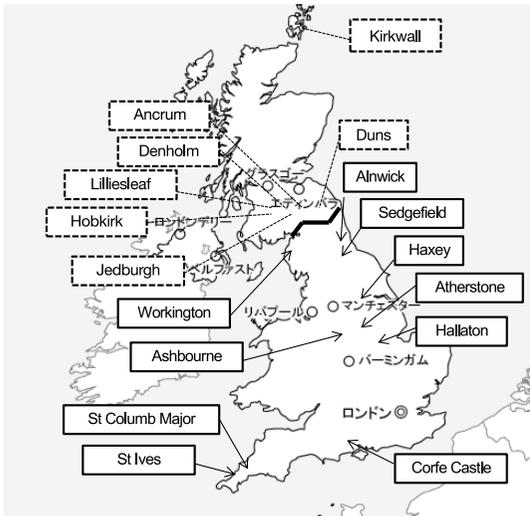


図1 英国に存続する民俗フットボールの位置

4. 研究の結果

(1) 調査の経過

現地では収集した情報及び文献を頼りに、英国には17箇所の町や村で現在も民俗フットボールが行われている(ただし、Corfe Castleはセレモニーのみ)ことを確認した。それらはスコットランドで7箇所、イングランドでは10箇所の合計17箇所であり、地図上にプロットしたのが図1である。

スコットランドに存続する7つのゲーム(Kirkwall, Ancrum, Denholm, Lilliesleaf, Hobkirk, Jedburgh, Duns)の調査は2007年度末までに終了し、それと一部並行してイングランドのゲームの調査を実施した。具体的に

は、1998年度にAshbourneへ、2006年度以降、イングランドの9箇所の町(Sedgfield, Alnwick, Workington, Atherstone, St Ives, St Columb Major, Haxey, Hallaton, Corfe Castle)への調査を行った。ゲームの開催が不定期であることや告解火曜日(Shrove Tuesday)に重なっていることから、1年に1箇所しか調査できないこともあった。結局、調査は2015年に終了し、1993年以降、20年を越える歳月を要した。

(2) スコットランドに存続する民俗フットボールの類似性と多様性について

かつて英国全土で行なわれていたといわれる民俗フットボールであるが、その多くが消滅したにもかかわらず、スコットランドではKirkwall, Ancrum, Denholm, Lilliesleaf, Hobkirk, Jedburgh, Dunsの計7箇所の町や村で現在もゲームが行われている。Kirkwallは、スコットランドの北部オークニー諸島に位置し、他の6つのゲームはスコットランド南部のボーダーズ地方に位置している。スコットランドでは、これらのゲームを“football”と呼ばず、“ba”(バー)と呼んでおり、特に、ボーダーズのゲームは“handball”あるいは“hand ba”と呼ばれることが多い(吉田、2000)。

実際にゲームを観戦し、これまで収集した資料をもとに、7つのゲームの特徴を整理したが、表1である。以下では、Kirkwallとその共通性が多いと受け止められるボーダーズ地方のゲームを対比的に考察することにより、スコットランドに存続する民俗フットボールの実態について、その類似性と多様性の視点からまとめた。

まず、Kirkwallとボーダーズのゲームの相違点として、①ゲームの開催日 ②用いられるボールの数(ゲーム数) ③ボールの形状(大きさや重さ、飾り) ④ゲームの規模(プレイヤーの数) ⑤試合時間 ⑥ゲームの運営組織の有無 ⑦勝者への褒美、などが挙げられる。

Kirkwallのゲームは、クリスマスと元旦に

表 1 スコットランドに存続する民俗フットボールの比較

	Borders							
	Orkney	Jedburgh	Denholm	Anorlum	Lilliesleaf	Hobkirk	Duns	
人口	Kirkwall 7,000	4,000	600	400	250	200	2,600	
開催日	クリスマス&元旦	不定日	不定日	不定日	不定日	不定日	7月の第1日曜日後の金曜日	
開始時間(試合時間)	Boys' Ba - 午前10時 Men's Ba - 午後1時	不定日 Boys' Ba - 午前11時 Men's Ba - 午後2時 (B-1.5~2.5時間, M-約5時間)	不定日 午後4時から5時(不定時) (2~2.5時間)	Boys' Ba - 午前11時 Men's Ba - 午後1時 (B-1~1.5時間, M-約4時間)	午後1(午後3時まで)	午後3時 (3~6時間, たまに夜中まで)	午後6時 (1~1.5時間)	
プレイヤーの年齢	Boys' Ba - 7歳から15歳 Men's Ba - 16歳以上	Boys' Ba - 15歳以下 Men's Ba - 16歳以上	制限なし(実際は高校生以上)	Boys' Ba - 15歳以下 Men's Ba - 16歳以上	5歳から11歳までの小学生(男女、結婚祝いのゲームは大人も参加)	制限なし(実際は成人)	制限なし(実際は高校生以上)	
使用されるボールの数	両ゲームとも1個	Boys' Ba - 5~7個 Men's Ba - 10~12個	7~8個	Boys' Ba - 2 or 3個 (9歳以下、12歳以下それぞれ) Men's Ba - 7~8個	8~10個(4つの学年で各2個) 12歳以下、16歳以下それぞれ & 結婚祝いゲームに数個)	10~12個	3個	
ボールの特徴	牛の皮にコルクコアが詰められ、表面は黒と茶色の二色でペイント。大きさは1.5~1.8kg、重さは2~3kg	牛革の中にわらを詰め、茶色の球形のボール、リボンで覆われ、大きさはクリケットボールと同じ。重さは約200g	牛革の中にわらを詰め、茶色の球形のボール、リボンで覆われ、大きさはクリケットボールと同じ。重さは約200g	牛革の中にわらを詰め、茶色の球形のボール、リボンで覆われ、大きさはクリケットボールと同じ。重さは約200g	牛革の中にわらを詰め、茶色の球形のボール、リボンで覆われ、大きさはクリケットボールと同じ。重さは約200g	牛革の中にわらを詰め、茶色の球形のボール、リボンで覆われ、大きさはクリケットボールと同じ。重さは約200g	牛革の中にわらを詰め、茶色の球形のボール、リボンで覆われ、大きさはクリケットボールと同じ。重さは約200g	直径15cm、厚さ7cmのスコーンのような形状で、中に綿が詰められ、重さは約300g。3つのボールは金色・銀色・赤&黒にペイントされ、小さなリボン付
チーム区分	Uppies vs. Doonies	Uppies vs. Doonies	Uppies vs. Doonies	Uppies vs. Doonies	West vs. East	Uppies vs. Doonies	既婚者 vs. 未婚者(男性のみ)	
プレイ空間(エリア)	町全体(主にストリート上)	町全体(主にストリート上)	村全体(ゲームは村の中心にある芝生の空き地及びストリート上)	村全体(ゲームは村の中心にある芝生の空き地及びストリート上)	牧草地(1区画)	村全体(主にストリート上)	町の中央広場(石畳)	
ゴール、ゴールまでの距離	Uppies - 民家の壁 Doonies - 船着場(2km)	Uppies - 城 Doonies - Skip Running Burnという橋(1.5km)	Uppies - Honeyburnという橋、Doonies - Gang という牧草地(1km)	Uppies - (upper side)にある古い民家の壁、Doonies - (lower side)に壁(500m)	West - 西側のフェンス(を越す)、East - 東側のフェンス(を越す)(100-300m)	Uppies - 村のupper sideにある壁、Doonies - lower sideにある橋(3km)	青いドラム缶(既婚者 - 南サイド、未婚者 - 北サイド)(100m)	
プレイヤーの人数(ボールにかかわっている人)	Boys' Ba - 50~70人 Men's Ba - 200~300人	Boys' Ba - 50~80人 Men's Ba - 40~50人	20~30人	Boys' Ba - 10~20人 Men's Ba - 20~30人	10~20人(小学生)、40~50人(Wedding game: 小学生十人)	10~20人	30~40人	
女性の参加	可(実際は応援かスクラムの外から押すのみ)	可(実際はほとんどプレイしない)	可(実際はほとんどプレイしない)	可(実際はほとんどプレイしない)	可(男女関係なくプレイ)	可(実際はほとんどプレイしない)	不可	
ルールの有無	明文化されていない	明文化されていない	明文化されていない	明文化されていない	明文化されていない	明文化されていない	明文化されていない	
運営の組織	Ba' committee	Jedburgh Callants' Club (統括責任者: Mr. Billy Gillies)	なし	なし(Coordinator: Mr. Iain Heard)	なし	なし(Coordinator: Mr. Henry Douglas)	Duns Summer Festival Committee	
運営の経済的基盤	住民からの寄付	住民とビジターからの寄付	住民からの寄付	住民からの寄付	住民からの寄付	住民からの寄付	Duns Summer Festival Committee	
始球者	Ba' committeeによる人選決定	寄付者	寄付者	寄付者	寄付者	Mr. Henry Douglas	Duns Castle family (金色のボール), Festival queen (銀色), girl (赤+黒のボール)	
勝者への褒美	なし	ボールが勝者それぞれを家に飾る	賞金(£20~50) or ビール(pintsのビール)	賞金(£20~25) & ハブの店主からビールと食事	賞金(小学生のゲームは£3, wedding gameは£5)	賞金(£20-25)	ボール(勝者はそれを家に飾る)	
審判の存在	なし	なし	なし	なし	なし	なし	あり(Mr. Tommy Redpath)	

開催され、ボールもバレーボール大であり、ボーダーズで使用されるボールと比べて大きく、重い。また、Ba' 委員会という運営組織を持ち、町の一大イベントとしてプレイヤーも200人を超える盛り上がりを示している。さらに、Kirkwallのゲームはボーダーズのゲームの曖昧さとは異なり、厳格に定刻どおりゲームが開始され、ゲーム前のセレモニーの開催など儀式性を有し、民俗フットボールの中でも共同体の生活パターンを構成する一要素として制度化され、整ったものであるといえる。同じボーダーズ地方に位置しながら、Dunsのゲームは他と少し異なる要素を持っている。それは、Dunsのゲームが「既婚者」対「未婚者」という伝統的チーム区分を引き継ぎ、1949年にサマー・フェスティバルの一プログラムとして現代的ゲームに再創造され、復活したことである(吉田、2002a)。

一方、Kirkwallのゲームとボーダーズ地方のゲームには、いくつかの類似点も見られる。例えば、①参加人数の制限はないこと ②明文化されたルールを持たないこと ③ゲームが住民からの寄付で成り立っていること ④Dunsを除いて審判は存在しないこと、などである。それらに加え、ゲーム中のプレイ行為においてもいくつかの類似性が見出される。それは、①ボールを蹴ることは稀で、ボールに群がる密集、あるいはスクラムプレイの連続 ②ボールを秘かに運ぶ(smuggle)というプレイが重要な戦術となること ③スクラム内での激しい身体の圧迫 ④ときに激しい殴り合い ⑤着衣の破損、などである。かつてのゲームは死者が出るほどかなり激しいものであったとされているが、現在は年配者が揉め事を治め、また家屋に損壊を与えないように自粛を求め、あとはプレイヤー自身の感情のコントロールの範囲で争われている。

そして、ボーダーズ地方のゲームはいくつかの違いはあるものの、かなり類似している。ゲームの開催日が伝承詩に基づいて決められていること、ボールの大きさや装飾、勝者への褒美に加え、ゲームの様相がほとんど同じであるなど、ボーダーズという地域にある町や村が何

らかの関係性を保ち、支え合いながらゲームを存続させているように思われる。地元の人々は口をそろえて「ボーダーズは昔から保守的な地域だから」とゲームの類似性の理由を問う質問に答えていた。

先述のDunsの「既婚者」対「未婚者」のゲームに加えて、Lilliesleafでは、小学生だけのゲームが行われるなど、ボーダーズ地方のゲームを一括りにはできないものの、地理的に隣接していることで、ゲームにはかなりの類似性が認められる。しかし、全く同じゲームは存在せず、多様性をもって存続していることがわかる(吉田、2009)。

(3) イングランドに存続する民俗フットボールの類似性と多様性について

イングランドに存続する10箇所の民俗フットボールの特徴について、スコットランド同様に16項目に基づいて整理したのが、表2である。

民俗フットボールが存続する10箇所は、イングランド中に散在し、それらのゲームが行われているのは、Hallatonを除き、数千人から2万5千人規模の人口を有する町や都市である(スコットランドは数百人から数千人)。開催日は告解火曜日、また復活祭(Easter)の時期に集中しており、ゲームの開始時間は、プレイヤーである成人の仕事を配慮して午後の開催がほとんどである。また、スコットランドではゲームの終了時間は定められていないが、イングランドではAlnwickはじめ、4つの町のゲームでは終了時間が設定されている。スコットランドとは違い、ゲームはほぼ定められた時間に開始される。

参加するプレイヤーについては、St Ivesを除いて、年齢制限はない。その人数は、100名から150名、さらに300名から500名にも及ぶゲームまでである。女性の参加を認めないところはないが、ゲーム中、女性はスクラムを外から少し押す姿を見るくらいである。ただし、AshbourneとWorkingtonでは過去に女性の勝者が誕生しており、勝者のリストに刻まれている。

表2 イングランドに存続する民俗フットボールの比較 (続き)

	Alnwick	Sedgefield	Ashbourne	Atherstone	Workington	St Columb Major	St Ives	Haxey	Hallaton	Corfo Castle
人口	8,000	4,500	10,000	8,300	24,300	4,000	11,000	4,500	500	1,500
女性の参加	可(17歳以上の女性留学生、女子高校生も参加)	不可	可(1948年、1957年に女性の勝者、勝者、翌年は男性、女性はスラムの外から来ているのを避ける)	第1スラムの90分間は可算、第2スラムの90分間のゲームは不可	可(勝者、女性はスラムの外から来ているのを避ける。0の6年に初めて女性の勝者が現れた)	可(参加している家はほとんど見られない)	可(伝統的にボールに慣れたことは無い)	可(勝者、女性はスラムの外から来ているのを避ける)	不可	不可
ルールの有無	ルールに準ずる印刷物が存在(左手の使用は禁止、オアシドに近しい行進への罰則)	明文化されていない	明文化されていない	明文化されたものが存在	明文化されていない	明文化されていない	明文化されていない	明文化されていない	明文化されていない	なし
運営の組織	あり(Alnwick Stroudside Football Committee)	なし	あり(Royal Stroudside Committee)	あり(Atherstone Ball Game Committee, 2011年〜)	なし(ただし、直後の委員会組織ではないが、Workington Lifeboatという組織がチャリティーイベントを主催し、募金を集めている)	なし	なし	なし	Hallaton's Bottle-Kicking 人組合	Puchelの大臣石職人、石工職人組合
運営の経済的基盤	住民からの寄付	住民からの寄付	住民、地元企業、団体からの寄付	住民からの寄付	住民、スポンサーからの寄付(チャリティーなどからも)	住民からの寄付	カウンシルからのサポート	住民からの寄付	住民からの寄付	組合から支援
地域者	過去の勝者あるいは委員会から選出された人物	寄付者(なかでも古い住民)	町の名工(委員会決定)	寄付者、あるいは委員会から選出	寄付者	寄付者	町長(Mayor)	寄付者	なし	なし
勝者への褒賞	ゲームで使用されたボール、他にゲーム中の得点者には賞金が授与される(賞金はゲームは10、第2ゲームは15、30、またグラスゴリアーには22)	ゲームで使用されたボール、勝者への賞金が授与される(賞金は20、第2ゲームは15、30、またグラスゴリアーには22)	ゲームで使用されたボール、トロフィー、そして17歳以上や複雑なゲームで賞金を授与される(トロフィーは賞金が授与される、入場料は無料)	ゲームで使用されたボール、トロフィー、そして17歳以上や複雑なゲームで賞金を授与される(トロフィーは賞金が授与される、入場料は無料)	ゲームで使用されたボール、トロフィー、そして17歳以上や複雑なゲームで賞金を授与される(トロフィーは賞金が授与される、入場料は無料)	ゲームで使用されたボールを所有しないならば、翌年の勝者のボールを使用しなければならぬ。そしてTown Hallの勝者ボールを授与される。若しゲーム後にボールを持って帰る場合は、トロフィー、トロフィーのゲームで勝ったチームメイトにボールが授与される(トロフィー、ボールにボールを入れ替える)	ゲームで使用されたボールを授与しないならば、翌年の勝者のボールを使用しなければならぬ。そしてTown Hallの勝者ボールを授与される。若しゲーム後にボールを持って帰る場合は、トロフィー、トロフィーのゲームで勝ったチームメイトにボールが授与される(トロフィー、ボールにボールを入れ替える)	ゲームで使用されたボールを授与しないならば、翌年の勝者のボールを使用しなければならぬ。そしてTown Hallの勝者ボールを授与される。若しゲーム後にボールを持って帰る場合は、トロフィー、トロフィーのゲームで勝ったチームメイトにボールが授与される(トロフィー、ボールにボールを入れ替える)	ゲームで使用されたボールを授与しないならば、翌年の勝者のボールを使用しなければならぬ。そしてTown Hallの勝者ボールを授与される。若しゲーム後にボールを持って帰る場合は、トロフィー、トロフィーのゲームで勝ったチームメイトにボールが授与される(トロフィー、ボールにボールを入れ替える)	ゲームで使用されたボールを授与しないならば、翌年の勝者のボールを使用しなければならぬ。そしてTown Hallの勝者ボールを授与される。若しゲーム後にボールを持って帰る場合は、トロフィー、トロフィーのゲームで勝ったチームメイトにボールが授与される(トロフィー、ボールにボールを入れ替える)
審判の存在	あり(各チームから2人、計4人のアソシエイト)	なし	委員会からの審判が授与される、家連などの審判が授与される	なし	なし	なし	なし	審判に近い存在として、11人のBeginsが授与される、家連などの審判が授与される	なし	なし

使用されるボールについては、ゲームが行われる日に1個のボールが使用されるが、Ashbourneではゲームの展開によって各日最大3個のボールが、Hallatonでも展開によって最大3個の小さなビア樽がボールとして使われる。ボールの仕様(形状・大きさ)は様々で、現在のサッカーボールを使うところ、バスケットボール大、クリケットボール大のボール、ラグビーボールのような形をしたもの、円筒形、ビア樽などと多様である。ほとんどが中に詰め物をして、茶褐色をしているが、Ashbourneではボールを投げ入れる人物の特徴を絵にしてカラフルにペイントされている。またSt Colum MajorとSt Ivesでは、ボールを銀のプレートで覆った「シルバーボール」と呼ばれるボールが使われる。

民俗フットボールは基本的に2つのチームがボールを奪い合い、自陣のゴールへとボールを運ぶことで勝利する。スコットランドのゲームはDunsを除いて、町の山の手対下の手(海側対山側)、東対西といった地理的区分によりチームが形成され、争われているが、イングランドでは、教区対教区、また隣接する町対町が争うというゲームがあり、Sedgfield、Atherstone、St Ivesではチーム区分が喪失し、個人あるいはグループでプレイしている。

ゴールは、町のはずれ、例えば、かつて水車小屋があった場所など特定の場所に、ゴールとして固定された目標物が設置されているゲーム、また、パブがゴールとなっているゲーム、そして、川を越えるとゴールになるなど、固定した目標物、ある一定の広さの空間や町や川といった境界を越えればよいというものまで多様である。しかし、Sedgfieldでは、かつて2つのゴールが設置されていたが、片方のゴールが消滅し、Atherstoneでは、ゴールそのものが消滅し、特定の時間が来たときにボールを保持していれば勝者になるというゲームもある。

スコットランドと同様に、イングランドでも民俗フットボールには「ルールはない」と地元住民は話す、ゲームはいつ始めるか、ゴールはどこで、どうなるとゲームは終了するかと

いった約束事は存在する。しかし、それらを含め、明文化されることはなく、地元の人たちは当たり前のことをわざわざ文章に残してはこなかった。しかし、AlnwickとAtherstoneにはメモのようなものが存在する。

特定の人物がコーディネイト役となり、また、Alnwickをはじめとする4つの町ではゲームを運営する委員会組織が存在し、ゲームを組織的に運営し、経済的基盤を築く役割を担っている。

大変厳しい争いの中で勝者となった人物に与えられる褒美は、スコットランドでもそうであったように、ゲームで使われたボールが授与される。また勝者のみならず、勝利したチームのプレイヤーにビールが提供され、勝者に賞金が授与されており、高額ではないが、ゲーム参加へのモチベーションになっている。

そして、審判はほとんどのゲームで存在しないが、Alnwickにはそれが存在する。しかし、その役割はゴールしたかどうかを判定し、ボールが一定の範囲を出た場合にキックインするくらいである。また、Haxeyでは、揉め事を收拾し、家屋の損壊を防ぐための数名のボギンズ(Boggins)と呼ばれる監視役が配置されている。

このように、イングランドに存続するゲームは、イングランド中に散在していることもあり、その共通性はほとんど見られず、多様であることがわかる(吉田、2017)。

(4) 民俗フットボールの存続の背景

1) 「伝統」の継承への意識

Kirkwallの住民に実施したBa'についてのアンケート調査から、それは自分たちにとって固有の楽しみをもつ伝統であると受け止め、サッカー・ラグビーの原型という意識はなく、近代スポーツとは異なる脈絡で捉えていることがわかる。では、その楽しみは何かと問うと、「ライバル心・団結心」、「サッカーやラグビーにない激しさ、興奮、自由、自立、偶然性」、「ルールがないということから生まれてくる自制心」、そして「興奮、偶然性」といった答えが返ってくる。そのような継承への思いは、大人だけ

ではなく子どもたちや女性たちからも確認できる(吉田、2004)。

これまで英国皇太子が Ashbourne に二度訪れ、ゲームの始球式でボールを投入している。Ashbourne のゲームがロイヤル・シュロヴタイト・フットボール (Royal Shrovetide Football) と呼ばれるのはそのためである。王室から「ロイヤル」という言葉を使うことを許可され、その称号が付与されているゲームをプレイしていることを彼らは誇りに思い、そのことを自負し、それが存続に対する強い意識にも繋がっている(吉田、2001)。

2) ゲーム存続の苦勞と工夫

民俗フットボールが存続しているとはいえ、特に田舎の村では、若者が都市や他の地域へ移住する傾向があることから、ゲームの存続は決して安泰とは言えず、危ぶまれるところもある。特に、Hobkirk などはゲームを仕切る長老がいなくなれば、同時にゲームも消滅してしまう可能性が心配される(吉田、2002b)。

しかしながら、いくつかの町では次代の担い手となる子どもたちに積極的に働きかけ、ゲームの理解と歴史・伝統の重みを伝えようとする試みがされている。例えば、Kirkwall では、Ba' 委員会のメンバーがグラマー・スクール(11歳から16歳までの中等学校)に出かけ、ボールづくりの実演を見せ、勝者に与えられたボールの実物に触れさせ、ゲームの歴史や開催意義を少年・少女たちに伝える取り組みが行われている(Taylor, 2010)。

3) 観光のためのイベント化と経済的効果

Duns では、1949年に町の活性化のためにサマー・フェスティバルというイベントを開催する時に、かつて告解火曜日に行われていた民俗フットボールを復活させた(現在7月の第1週の金曜日に開催されている)。しかし、それは過去のゲームとはかなり異なるゲームに再創造され、ボーダーズの周りの町や村から多くの人が見物にやってくる。フェスティバルのクィーンがボールの始球役を務めるなどイベント性が強く、またポスターが貼られ、ビラも配られるなど観光色が強い(吉田、2000)。これは、

存続する民俗フットボールの中でもユニークな形態である。

他のゲームも、Duns ほどではないが、地元の観光パンフレット、ガイドブックにゲームの記事が掲載され、さらに最近では、インターネットを利用して町のホームページに掲載するなど町や地域の観光行事として広報活動が行われている。また、Ashbourne や Kirkwall では、ゲームの関連グッズ、例えば、Tシャツ、トレーナー、タオルなどが販売され、その売り上げも近年好調だと聞く。このように、最近ではゲームがイベント性を強くすることにより経済的効果が期待されるということも、ゲームの存続に繋がっているようである。

4) メディアの関心と連携

Ashbourne や Kirkwall のゲームは、メディアの関心を集め、英国の全国ネットのテレビで度々放映されている。先述のように、Ashbourne に英国の皇太子が二度訪れたというのは、メディアの関心を引き、それによって国民からの注目度も高まり、現在ではプレイヤー、見物人、関係者を合わせて7000人近い人たちがゲームに集まってくる。また、Atherstone では、筆者が訪問したときに、ITV という英国のメジャーなテレビ局の女性キャスターに始球役の名誉が与えられ、その様子がテレビ放映された。それにはゲームをメディアに露出させ、認知度を高めようとする意図があったと、ゲームの広報担当者は話していた。ゲームが始まると、コートとなる狭いストリートは数百人の人たちで埋め尽くされる。

また、個人がゲームを記録し、YouTube のような動画共有サービスを利用してゲームの様子を配信したり、新聞社やテレビなどのメディアが自社のホームページに記事を掲載しており、それらの媒体を通してゲームの情報を得て観戦・見物にやってくる人たちも多い。

5) ゲームを支える委員会組織の存在

ゲームを支える組織については、Kirkwall、Ashbourne、Alnwick、Atherstone のゲームは委員会組織をもち、その委員会がゲームの運営の母体となり、存続に大きな役割を果たして

いる。委員会の役割・機能としては、ゲーム開催に必要な費用の調達、始球式でボールを投入する人物の人选、ボールの製作の依頼、カウンシル及び警察はじめ関係機関との連携・調整（ゲームによる破損の補償、ゲーム後の清掃、怪我やトラブルの対応など）、ゲームの広報（テレビ・新聞などメディアとの対応）などである。なかでも、ゲーム後の家屋等のダメージに対する対応、ゲーム中におきた大怪我の対処、ごみ処理には苦勞しているようである。委員会のメンバーは、Ashbourne は 12 名、Kirkwall は 6 名、Alnwick は 64 名、Atherstone は 10 名で組織されているが、どこも年配者・高齢者がその中心となっている。

基本的には、委員会のメンバーが次のメンバーを人选し、リタイアした委員の補充をしながら委員会組織を存続させている。

6) 賞金の授与

Kirkwall、Ashbourne、Atherstone、Sedgfield、St Columb Major、Duns の 6 つのゲームでは、ボールが戦利品とされ、それを得ることが名誉とされている。その他のゲームでは、ゴールをした者にわずかながら、賞金が授与される。かつて行われていたゲームも、勝者に賞金や食事や酒が振る舞われ、ゲーム後には勝者を称えるパーティーがパトロン（公爵など町の有力者）によっても催されていた。その賞金は、寄付が基本であり、高額から小額まで幅広い寄付が寄せられている。特に高額寄付者に対しては、委員会組織を持つゲームでは、委員会がその厚意への感謝として、ゲーム前のセレモニーでその寄付行為を紹介し、また地元紙に記事として掲載するように働きかけている。

授与される賞金は決して高額ではないが、賞金を得るということは、ゲームへの関心やモチベーションを高め、特に、現在参加するプレイヤーが減少し、またゲームを維持させるために苦勞しているところでは、プレイヤーを確保するための方策となっている。

7) 民俗フットボールとアソシエーション・フットボールの共存

民俗フットボールは、それが存続する中で、

町にアソシエーション・フットボールあるいはラグビー・フットボールが紹介・導入されたときに共存を強いられた。Kirkwall では 1891 年民俗フットボールのゲームが行われた後にアソシエーション・フットボールのゲームが行われた (Robertson, 1967, 2005)。Alnwick でも 1883 年と 1884 年に、その共存の記録が残されている (Garnham, 2002)。しかし、ある町では民俗フットボールと近代スポーツのどちらかを選ぶための住民投票が行われ、その結果、民俗フットボールを廃止し、アソシエーション・フットボールを選択したところもある。たとえ近代化が推し進められようと、民俗フットボールをプレイすることの意味や存続への強い意識が住民たちの中に共有されているところは両者は共存し、今に至っている。

(5) 民俗フットボールの変容内容

1) プレイ空間の制限

Kirkwall や Ashbourne のように、かつてそうであったように、プレイする場所は制限せず、自由である。そのため、プレイヤーはゴールまでいろいろな道筋を考え選択することができ、見ている人もどのルートでゴールするのか、その不確定さが面白いという。

しかし一方で、町に移り住み、家を所有する新興住民にとっては、無礼講のような破壊的行為は生活を脅かす厄介な存在となる。人々もつ生活感覚、道徳感、治安維持などの意識の変化によって、たとえゲームの意義を理解していても、その荒々しさによる家屋や施設の損壊をその代償とすることはできなくなった (Garnham, 2002)。そのため、Atherstone では、ストリートの特定の範囲だけでゲームがプレイされるようになり、Alnwick では、町中から特別に指定された空地に移動し、ゲームが行われるようになった。委員会組織がその対応に尽力しているが、カウンシルとの補償問題のやり取りにはかなり苦勞しているようである。

2) ボールの変化

プレイ空間とともにボールも変化している。かつて民俗フットボールでは、牛や豚の膀胱が

使用されたという言説は有名であり、それはいくつもの資料の記述から確認することができる。

しかしその後、ボールは牛の皮の中にコルクくずや藁、あるいは綿を詰めたボールへと変化する。それは、スクラム状態の中での激しいボールの奪い合いに耐えなければならず、ボールの耐久性が求められ、また、手で投げたり、手に持って走るのに適したものが求められた結果である。例えば、Kirkwall では、1830 年代に空き地からストリートにゲーム空間が移動したことに伴って、それまでの動物の膀胱を革で覆って作られたボールから、ボール中にコルクくずが詰められた堅く重いボールに改変された。それは、草地でのプレイから石畳や未舗装の大小のストリート上をボールが転がり、そこで人々がボールに群がることで受ける圧迫に耐え得る仕様のボールが求められたからだといわれている。一方で、ゴムチューブが開発され、それによりボールも改良され、Atherstone では、ゴムチューブを入れたボールを用い、Alnwick では、現在のサッカーボールがそのまま使用されている。

3) ゲーム時間の制限

かつてのゲームは制限時間が設けられていなかったが、時代とともに社会的、経済的な影響を受け、プレイ空間同様に、プレイの時間も制限されるようになった。Ashbourne は午後 2 時にゲームがスタートし、午後 10 時までにはゲームが終わらなければならない。Atherstone ではゲームの時間が午後 3 時から午後 5 時までというように時間の制限が加えられている。他に、Alnwick では、第 1 ゲーム、第 2 ゲームそれぞれ最大 30 分間で行われ、1 勝 1 敗の場合には 45 分を限度にして第 3 ゲームが行われる（トータルで最大 105 分）。Sedgfield では、午後 1 時から最大午後 6 時まで、そして、St Columb Major では、ゲームは午後 4 時 30 分に開始され、約 1 時間ストリートを行ったり来たりしながらボールをパスし、その後、各々のチームのゴールをめざす戦いが始まる。終了時間は決まっていないが、午後 8 時に勝

者は町のマーケット・クロスにやって来て、ここで勝利の確認をし、その後、勝者は銀のボールを持って町にある 6 つのパブを回っていく（吉田、2017）。

4) 文章化された約束事 の存在

民俗ゲームでは、基本的に明文化されたルールはないと言われているが、存続するいくつかのゲームには、現在のルールブックのような体裁はとっていないものの、約束事が記載されたノート、メモが存在する。

Alnwick のゲームでは、委員会のメンバー及び審判の名簿とともに、賞金の金額及びその提供の仕方、そしてその後のセレモニーに関する 8 項目にわたる内容が書かれた 1 枚のノートが存在する。以前は、委員会内部の資料として扱われたが、現在は一般にも配布されるようになった。Jedburgh では、町のインフォメーションで観光客からのゲームに対する質問に答えるマニュアルとして作成されたゲームの概要や約束事が書かれたプリントを入手した。しかしそれは、多くの人にゲームの理解を求めるために作成されたものではなく、個人的に作成されたゲームの説明用のメモであった。

これまで地元住民に暗黙の了解として口承で引き継がれてきたことを、文章化して示すのは、他所からゲームをプレイするため、あるいは観戦にやってくる人や新興住民にゲームを理解し、協力を求めてのことだと聞いた。さらに、これらの文書は、コミュニティ固有に存在する伝統が外に開かれていく契機を与えることにもなるのである。

5) チーム区分の喪失

チームの区分にも変化が見られる。Kirkwall のように、山の手 (Uppies)、下の手 (Doonies) という明確な区分が継続している一方、個人あるいは数人のグループでゴールをめざすというように、チーム区分が喪失するという変化も起こっている。

例えば、St Ives のゲームは、少年たちだけで行われるゲームであるが、チームの区分はなく、彼らは数人によるグループを形成し、連携してボールを持ち去る。また Atherstone で

は、プレイヤーが仲間と示し合わせ、合図と同時にボールの空気を抜いてタイムアップまで自分たちでボールを保持し続ける。これらのゲームにはゴールはない。スコットランドのボーダーズ地方に存続するゲームも、一応2つのチームに区分されているが、プレイ自体はかなり個人プレイに頼ったものである。それは、プレイヤーが町から町へとわたってプレイし、支え合っているが、チームとしてまとまりを持つほどの凝集性、組織性は見られない。

6) 審判の存在

ほとんどのゲームでは、審判は存在せず、セルフジャッジが基本である。しかし、Alnwickのゲームには審判が存在している。Alnwickでは各チームから2人ずつ計4人のアンパイア(umpire)が任命される。彼らは、ゴールの判定、ラフ・プレイのジャッジ、そしてボールが一定の範囲を出た場合に、ボールを蹴り入れるなどの役割を担っている。またDunsでは、レフリー(referee)が存在しており、ゲーム中の危険な場面を察知し、笛を吹いてゲームをストップさせ、またボールがスクラムからなかなか出てこない時にもゲームをストップさせる。いずれの場合もレフリーがボールを頭上に蹴り上げてゲームを再開させる。しかし時折、形勢の不利なチームに加担するかのようになり、その不利なチームに向けてボールを投げたり、ボールを手渡したりもする。どちらのゲームの場合も、現在の審判のような厳格さはなく、ゲームを演出するような存在となっている。

(6) 民俗フットボールの存続の意味

1) 地域の一体感の形成

日本と同様に若者が都会へと流出していく状況は英国も同じであり、特に産業革命による都市への人口の流入がゲームを大きく変容させた。かつて英国全土で行われていたといわれる民俗フットボールは、一般的に国王や統治者の禁止令や中止に導く議会の法令によって消滅していったといわれているが、それは大きな町のことであり、小さな村では都市化によって人口が激減し、それによりゲームの担い手がいなく

なり、ゲームが消滅したところが多い。現在、ゲームが存続している村でも人口減少の傾向があり、町への帰属意識を維持し、若者のUターンを期待してゲームが開催されている。一方、人口が流入している町では、新しく移り住んだ住民との一体感を形成する役割がゲームに期待されている。

いくつかのゲーム(Kirkwall, Jedburgh, Ancrum)では、大人のゲームだけでなく、子どもたちのゲームも行われ、また大人のゲームは消滅したが、子どもたちによってゲームが継承されているところ(St Ives, Lilliesleaf)もある。また、St Columb Majorで出会ったプレイヤーが「小さいうちから事あるごとにゲームの話子どもにしている。これが大切なんだ」と話していたように、大人が子どもたちにゲームの次の担い手となるように期待し、先人から受け継いだ我が村や町の大切な伝統を引き継ぎ、守ろうという強い意志が受け止められる。

このように、民俗フットボールの存続は、それをサッカーやラグビーという近代スポーツの原型の単なる生き残りではなく、それは固有の楽しみを持った伝統であり、地域のアイデンティティを形成し、住民の一体感を醸成する有効的手段となっている。

2) スポーツの「担い手」としての自覚

小さな村のゲームは、組織性が弱く、消滅の危機も想像されるが、そこに住む長老やオールド・プレイヤーたちが、個人、そしてグループによってゲームは準備され、運営されている。ボーダーズのゲームに見られるように、プレイヤーたちも他の村のゲームに参加し、プレイヤーの確保に協力し合っている。また、子どもたちのゲームを導入し、引き継ぐ工夫もされている。一方、比較的大きな町では、地元の名士や有力者に加え、長老、オールド・プレイヤーたちで組織された委員会がミーティングを重ね、ゲームを組織し、その運営にあたっている。特にKirkwallでは、ゲームによる家屋や施設の破壊に対する補償問題から、町の議会がゲームの廃止を求めたが、委員会が議会と何度も協議の場を持ち、回避させた(吉田, 2003)。この

ような役割を果たした委員会組織は、ゲーム存続のために住民が考え、生み出したものである。その委員会の中には、学校に出かけ、若い世代にゲームについての知識を提供し、ゲームの啓蒙に組織的に取り組んでいるところもある。

このような民俗フットボールの存続に向けた住民自身による主体的な取り組みからは、スポーツを「受け継ぎ、伝える」ための自覚と責任を体現した担い手としての姿を受け止めることができる。

3) スポーツの継承発展への示唆

英国において存続が確認できた民俗フットボールは、どのような要因を持ち得たことで存続したのであろうか。鶴見の「内発的発展」論によると、地域の発展には、その地域の自然生態系と伝統文化に即して住民らが自律的に創出する取り組みが必要であり、特に文化遺産としての伝統のつくりかえの過程、つまり「伝統の再創造」が不可欠であるとされている（岩佐、2015）。その鶴見の論を引き取れば、存続する民俗フットボールは、時代的背景に影響されながらも、住民たちがゲームを巧みに変容させ、あるいは再創造することで生き残りを果たし、それが町の存続・発展に寄与してきたと捉えることができる。そのためには、自律的な内なる発展を図るという住民の経験の積み重ねや集団的な知恵の蓄積が不可欠であり、それが時代を超えて引き継がれてきたともいえる。その変容・再創造は、決して普遍的なモデルを持たず、ゲーム固有の、そこに住む住民の固有のやり方で成し遂げられたことなのである（ホブズボウム、2016）。

さらに、たとえ地域の小さな伝統であっても、古いものを新しい環境に照らして、つくりかえる努力には、現在人類が直面している困難な問題を解く鍵を発見することができる（岩佐、2015）。またそれは、多様な発展の経路を切り拓くキー・パーソンとなり得ると考えるならば、近代スポーツ限界論の問題を解く鍵を民俗フットボールに求めることもできるのである。

5. 成果と今後の課題

本研究では、まず、英国内に散在し、現存する民俗フットボールの実態とその特徴を抽出し、まとめた。過去もそうであったように、現在も各地でそれぞれのやり方によってゲームが組織され、多様性をもって行なわれていることが確認できた。

また、ゲームはプレイ空間や時間を制限されるようになり、ゴールが消滅し、審判が導入され、そして疑似ゲーム化されたセレモニーだけが行われるなど、変容したゲームの姿を確認することができた。特に、イングランドのゲームは近代化とせめぎ合いながら、変化を余儀なくされたと考えられる一方で、それは、住民たちが知恵をしまり、巧みにゲームを変容させながら、これまで存続させてきたということもできる。

近代スポーツが臨界期にきているという指摘（中村、2007）がされて久しい。サッカー、ラグビーの起源といわれるゲームを継承し、それに固有の楽しみを見出している人々の姿に、近代スポーツのあり方を問い直すいくつかの視点も確認することができた。

今後は、民俗フットボールの研究成果を教育に還元できないか、ということを課題とし、特に、民俗フットボールを「体育理論」の教材として位置づける可能性について検討していきたい。

注

- 1) 英国国立フットボールミュージアムの元学芸員であった H. ホーンビイは、筆者からの情報を参考に調査をはじめ、2008年に“Uppies and Doonies”（Hornby, 2008）を刊行している。それは、英国に存続する民俗フットボール及びスクール・ゲームの姿を文化財として記録に残そうとするものであり、研究の成果を示そうとしたものではない。
- 2) 本研究では、英国のブリテン島の中で、スコットランドとイングランドをフィールド

として調査している。なお、ウェールズには民俗フットボールの存在を確認することはできなかった。

- 3) 中房 (1991) の民俗フットボールを整理した 13 項目の視点を参考にして、16 項目を設定した。

文献

- Banks M.M. (1937), *The game on the Borders*, in *British Calendar Customs - Scotland*, Vol.1, pp.15-16.
- Buist A. (1961) *The Same With A Difference*, *Scots Magazin*, Vol.74 No.4, pp.313-316.
- Collins, T. (1998) *Rugby's Great Split: Class, Culture, and Origins of Rugby League Football* (Cass Series-Sport in the Global Society), Frank Cass & Co.
- ダニング E.・シャド K. (大西鉄之祐・大沼賢治共訳) (1983), *ラグビーとイギリス人*, ベースボールマガジン社
- Garnham N. (2002) *Patronage, Politics and Modernization of Leisure in northern England; the case of Alnwick's Shrove Tuesday football match*, *English Historical Review*, No.474, Nov., pp.1228-1246.
- ホブズボウム E.・レンジャー T. 編 (前川他訳) (2016) *創られた伝統*, 紀伊國屋書店
- Hornby H. (2008) *Uppies and Doonies - The extraordinary football games of Britain -*, (English Heritage)
- 岩佐礼子 (2015) *地域力の再発見*, 藤原書店
- Lyle E., (1990) *Winning and Losing in Seasonal Contests*, "Contests" (ed. Andrew Duff Cooper) *Cosmos*, Vol.6
- Lyle E. (1998) *Winning a Ba'*, *School of Scottish Studies*, University of Edinburgh, TOCHER
- Magoun, F.P. Jr. (1938) *History of Football from the beginning to 1871*, *Kolner Anglistische Arbeiten*, Band 31
- Marples, M. (1954) *A History of Football*, Secker and Warburg
- 中房敏朗 (1991) *イギリスにおけるフォーク・ゲームの成り立ちとその多様性に関する研究*, *スポーツ史研究*, 第 4 号, pp.33-48.
- 中房敏朗 (1993) *イギリスにおけるフォーク・ゲームの競技関係者に関する一考察*, *仙台大学紀要*, 24 巻, pp.1-13.
- 中村敏雄 (2001) *増補オフサイドはなぜ反則か*, 平凡社リブラリー
- 中村敏雄 (2007) *近代スポーツの実像*, 創文企画
- Punchard F.N. (1928) *Survivals of Folk Football*, (Editor of "School Hygiene and Physical Education", Birmingham)
- Robertson, J.D. (1967) *Uppies & Doonies*, Aberdeen University Press
- Robertson, J.D. (1991) *An Orkney Anthology*, volume one, Scottish academic press
- Robertson, J.D. (2005) *The Kirkwall Ba'*, Dunedin Academic Press
- Shearman, M. (1887) *Athletic and Football*, Longmans, Green, and Co.
- Strutt, J. (1810) *Sports and Pastimes of the People of England*, Singing Tree Press
- Taylor C. (2010) *A lesson on the Ba'*, Orkney Media Group Limited, 2009/2010 season
- 山本浩 (1998) *フットボールの文化史*, ちくま新書
- 吉田文久 (2000) *スコットランドに残る民俗フットボールを訪ねて*, *現代スポーツ評論* 3, pp.166-169.
- 吉田文久 (2001) *イングランド・ダービーシャー地方に残る Street Football*, *名古屋短期大学研究紀要*, 第 39 号, pp.27-37.
- 吉田文久 (2002a) *A Report on the Folk Football Game surviving in the Borders, Scotland - about Duns Hand Ba' -*, *スポーツ人類学研究*, 第 3 号, pp.45-53.
- 吉田文久 (2002b) *スコットランド・ボーダーズ地方に残る民俗フットボール-ホップカーク*

のバー・ゲーム－, 名古屋短期大学研究紀要, 第 40 号, pp.273-278.

吉田文久 (2003) カークウォールのバー・ゲームにみる民俗フットボールの内容と変遷 (その 1), 名古屋短期大学研究紀要, 第 41 号, pp.111-125.

吉田文久 (2004) 民俗フットボールを支える人々のゲームに対する意識－カークウォールの住民に対するアンケート結果－, 名古屋短期大学研究紀要, 第 42 号, pp.195-212.

吉田文久 (2009) 英国スコットランドに残存する民俗フットボールについて－その独自性と類似性－, スポーツ学の冒険, 黎明書房, pp.109-120.

吉田文久 (2014) フットボールの原点－サッカーとラグビーの面白さの根源を探る－, 創文企画

吉田文久 (2017) 英国イングランドに残存する民俗フットボールについて, 現代と文化, 第 135 号, 日本福祉大学, pp.23-40.